美色佳家の花

前編

下

八幡良座町
萬國書籍所
西川勝輔

へ13
2925
3

へ 13
2925
3

昭和九年
七月六日
購求

春色田家の花三之巻

江戸　爲永春水作

第五回

ひつそり夜の月と花とをあるぐ〳〵ハ公家ふまん人ハ見せぬや
と流ぜ〳〵書の歌の庭とゝハ不圓寺も塗庫の紅葉を
清〳〵しゞ却て嬉〳〵き僥倖とゝりぬる宝家ハまゝ〳〵
ねど久〳〵逢ざるお千代ハ逢て潔〳〵も安堵〳〵ゞ狂
ゝ〳〵清〳〵動の立若ゝ泳生〳〵動ぶの

養生訓と世ゝ〳〵の中の長寿を伴ふ事そのよ所ハ厳ゐ止
宿〳〵とそ

世の人ゝ紙員二丁のるハいとさつま〳〵所の物語り
そのこゝろ
まことをうそ漢さのゝべ〳〵ぶ
ぶの〳〵の厳ゆて漢〳〵さるの限とうゝ
所ハ松の露と変ゐ説ねど年経る松の乃露ゐ身の延伏
よきこゝろ
清水の泉ゐ造山並ゐ〳〵ぬ景色湖人奥のるゐ娯さる
緒屋の透風まて葉〳〵ハ雅が袖の香ぞ身ゐ深斗

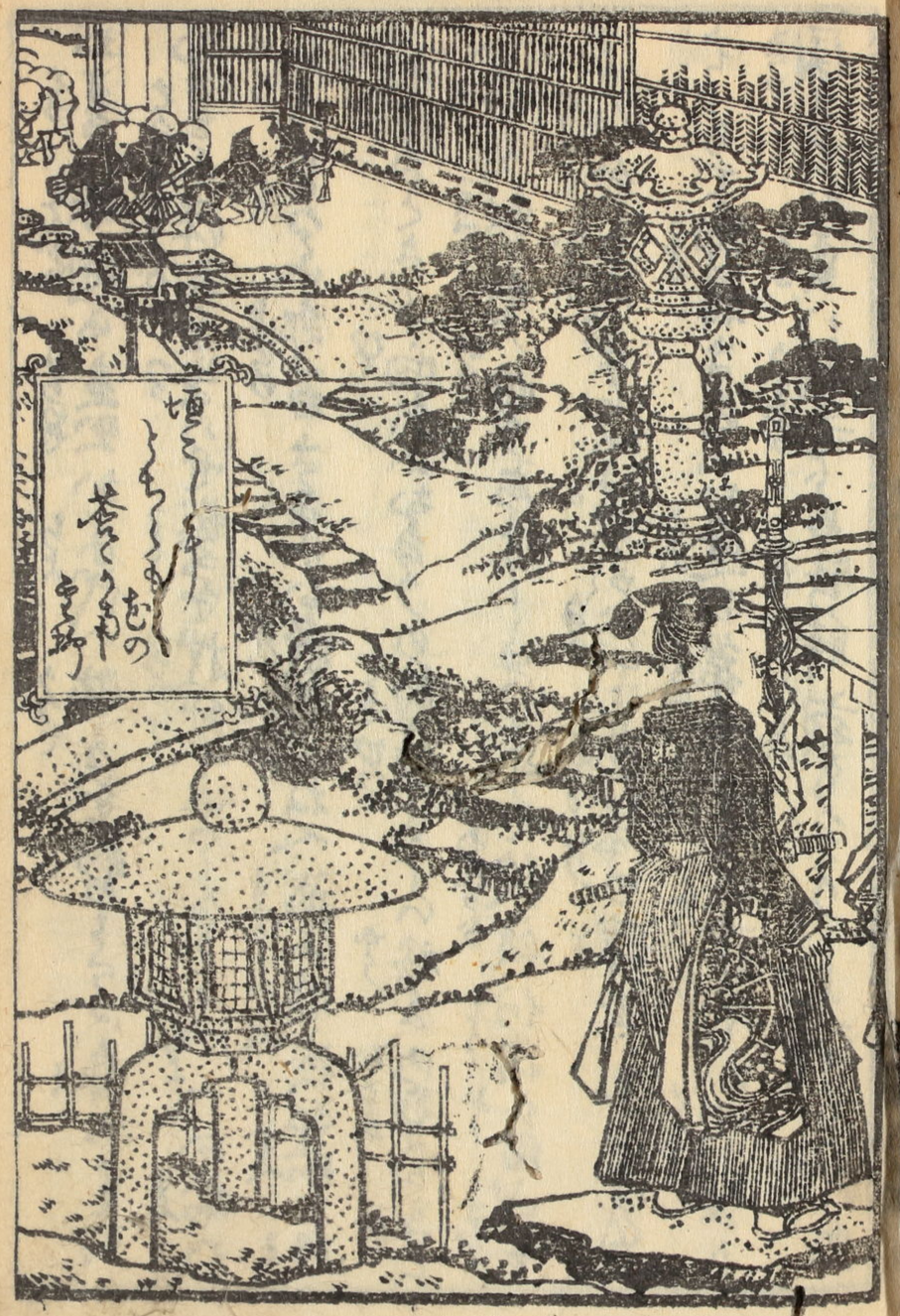
篠沼月ゆも叩〳〵容貌ハ窓の内射ふ境の面和ゐ齢ハ
三人の玉兎ごゆも叩〳〵ぬ赤道女の眉眼元白き顔の
髪数ハまばら〳〵極の風情ゆ〳〵物ゐ〳〵屋の明き扉を入り
家〳〵人〳〵家の程十七八歳と見へる若き色いと白く
眼ハまぐ〳〵〳〵のぎ〳〵の長く少そ女とも思ハ〳〵角髪
姿お仕ゆ開〳〵実ゐ〳〵ゆ乃小性達ゐ二三人外ゐ連さる
乃家来のあ〳〵ぬハ〳〵〳〵ゐ道所の乃武家のお屋敷様の
のゐゆ〳〵ん〳〵 若き〳〵ヨリヤ達ぞ居〳〵庭の景〳〵ゐ見わ〳〵

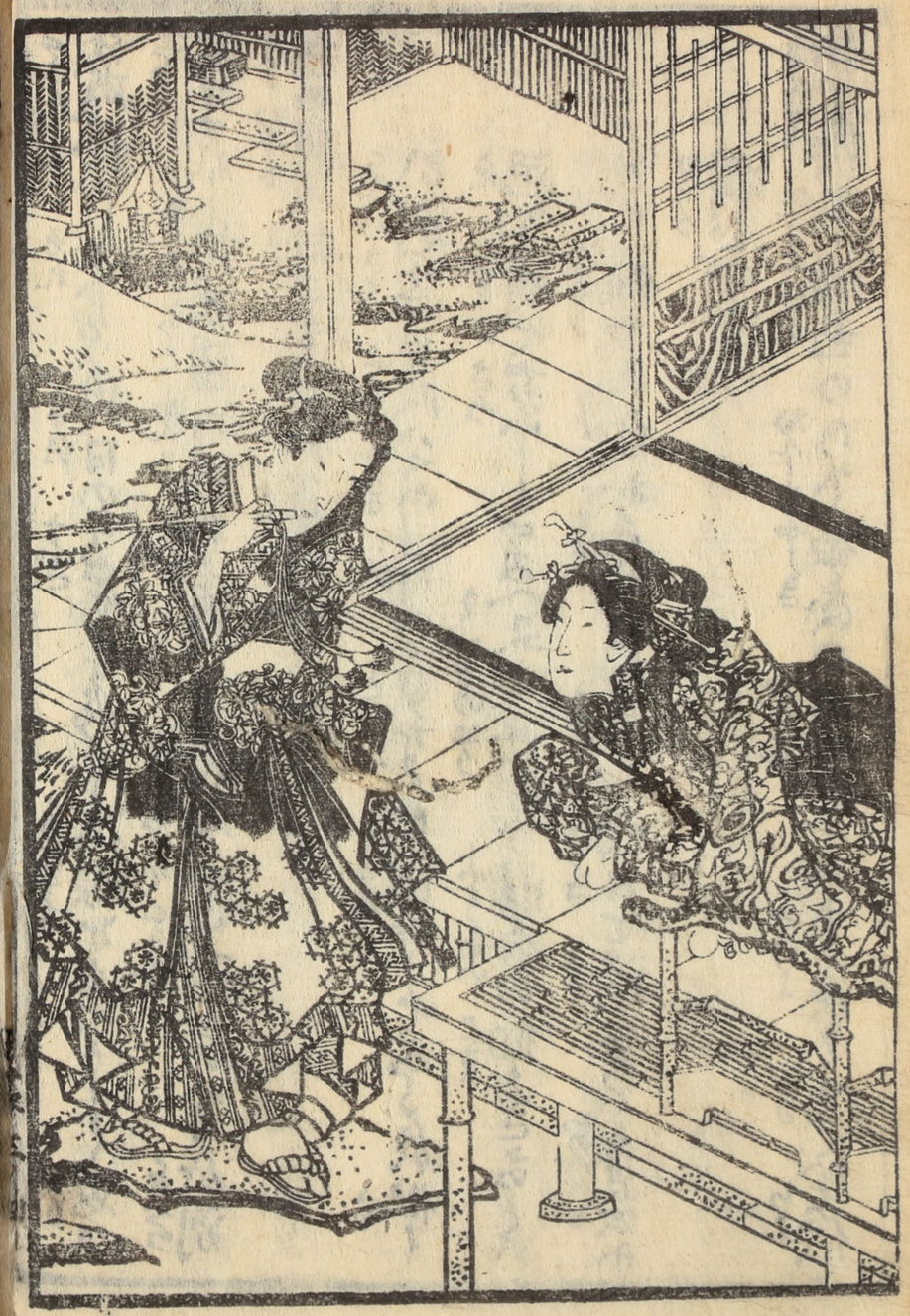
度て参りて こゝろぶらく見しまゐらせト 初めて見たる其の
自然へうる威光の人品 處女ハ窓より顔さし出し 恍惚
走り出 一ときらく人 立乃入まし 只今 雅も居りませんから 四
宮門をいろ〳〵まゐらせるが 出来ませんが 仙京四条を 表裏
まゐれば四見おを 頼ひあげまして 言葉しる 横丁町
家ふ 佛ある 発明ものとへいらひるぐら 歳 居り 處女 ふ 恥
〳〵 顔赤らめて 横側ふ 文へる 見らしき 貴賤 隔
〳〵 高へ人 まもの 郎若も 娘の顔ふ 貴賤ある人 通 待りの

りひ〳〵 ゐ 猶 像して 在せしが 近習の 元ふ 向ハまて 八 ぞん
寄ふ 此 屋の 殿 時 見りて 亭主ふ 根 夜の 恩 孫を
ちらまゐイト 作まへ 四 側 元も 形 屋へ 郎 若ふ 御 注
お 年 ゐまへ 同 孫の 用 意ふ ぐ 〳〵 て 勝手ふ 入り 武 別 屋の
頼り 人の 老父を 呼 出 て 中 国 けるが 今 月ハ 夜の
娘の 外ふ 一人も 人の 不在ハ 郎 若 ゐ 四 屬 ゐ 中 上 ゐ ハ
出来 まへ まひが 庭の 花を 四 見 注て 座 敷ふ 四 体 見 ハ 四
ふの 傍ふ 立 ゐ 入 娘ふ と 長 人 け ま へ 立 き 辺の 郎 若 ゐ け ん 終 日

代別荘の接びくらさまそひそふ處女へちさーく四月を
らと一種ごと四載まるのあつとけまとども町方ゐまとど大家の處女
緑の筆さえゆるの四月陸奥うーくさぐ先の豆腐ゐふの郎若さる
ゐ八分と思ひひくーくまとども町家の職ーき鼻を眼り手を赤ゐ
ゐて居ゐうーぶ郎若も四筆のゆるの四鼻ゐまとば清て手ゐを
ひぐーくのはぐ互ゐ表裏のおもひさを眼顔ゐ清くふくむのく
手貝八行ふくーく別荘のひーぶ流石ゐ大家の處ゐまとば表ゐ
乃ゐうーくのふゐもゐまとば四鼻のふゐ四横手ゐうんば赤ゐ

成程ーく丈ゐう月日のゐそまーく代眼を清ゐうーく男へ
暮ゐれーく別不園四眼ゐとゐうーく役唄女小方ゐの代別
荘の眼ゐ似ゐる代ゐのゐゐのうとゐ
代別荘の眼八ゐ月日のゐなまとば男ーく考ゐ俱ー
画を看て考ーくゐへ又手析ゐう情合の細きゐくふ
次の稼ゐ説ゐ代ゐの刻を漢のゐば角芸ゐ
得ゐべー
初丁後平周色の四下面表の四殿ゐそへ表も明ゐちゐ代ゐ





おまへハ極側ふ立ち　お千代ハ勝手を知つてる身なれば
おまへふ洋ゐを生ハせ　楽を拵付て　ちよへ　お花ハ
何月のころふ郎君さまふ　お逢のごねん　誠ふ昨夜　お花と郎
君さまとさ〜　向ひふ　おもうの時　時　まつの松ふ　四郎さまと
へさらら　私　ゆ　悔う　あまつ　ふ　て　彼渡　何　稲　ば　会
和合　社成　ごらふ　子　アノウ　何　て　ゆ　ら　体の　緯　で　わ　る　ま　ふ　子
ちづめて　郎君さまふ　お逢の　弟の　ゐ　を　乗　〜　お　ふ　る　ト
国　て　お　ハ　頼　赤　ら　ゆ　時　初　ゆ　う　〜　ば　源　ら　ゆ　ぬ

ふの底　ふ　ふ　ら　ゆ　て　お　千　代　ふ　ハ　頼　よ　ね　ば　ゆ　ら　う　雑　宮　と
ハ　う　と　ふ　ハ　て　ア　ふ　お　千　代　さ　ん　お　ま　さ　ん　ら　う　源
さ　ら　ふ　言　ま　ら　う　何　ま　ま　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら
ら　ら
ら　ら
ら　ら
ら　ら
ら　ら
ら　ら
ら　ら
ら　ら
ら　ら
ら　ら

莊の一間で居る時の思ひがけなく若殿の郎君様が
庭先の見物に出る入てゐる千代時代でもあて情人の成
ア本〳〵　アレサ千代さん然でハあるハヨテノウノ　ちよ〳〵只両方で
物合こだりうへ　ちよ〳〵本〳〵ちよこ抱ものりませんヨ私ハ生る
何のくれも然ハ只真流の思ひ　郎君さまの御様子人で
居所へおすひがけなく　のぞいて怖ろうて宅初ハ
ちよ〳〵て居ます　宅ちよ〳〵宅初ハ怖ろうて後でハ義理
おりゝどふふ様ハ　ちよ〳〵仮ハ　千代時

ちよ〳〵ハ　ちよ〳〵ハ　ちよ〳〵ハ　ちよ〳〵ハ　ちよ〳〵ハ

お妻もとより又た両親がなくて養育れバおりとしのと思ひ子とても お側よりハ変りまし
うし腹こゝろの苦労求やゝ妻の風花ゞあるゆゑ種々の
言ひもつ入出来ることを此時お千代ハ郎君の門意業て
出来り安ずゝ色うるお妻の側へ心寄ゝ家ゝ
ちよ〳〵モウ〳〵郎君さまゞお帰大漬落でハ仕ヨ アノま
お妻さんお帰今日ハ直ハ代ハ会表ハ上ハ ハて お在の様
ハ成ずハ不宜ゞ ちよハ 私一個でハ人ちよハ イエ

お帰ゞ郎君さまの門側ハ お在の様ハ極まバ行ずも まり不
自由のうハ様よ お手当をなしてる女中も四人ハ お帰ゞ
お生ハ成様よりて門上稽り方へも 断を達て門親
方へも数門家中へも門上通りの取扱ひと作おされるを
少 夫とと奥さまハ同帰ゞ 往ハ ハ
私ゞ然ハ〳〵 ちよハ イエ お帰さん
郎君さまのお公ハ お帰ゞ奥さまの様ハ 様ハ奥様
の門家ゞと門一生門ハ 様とと ハ 女様ハと

ぎ作りものハお采の肇を思ひ召し続けて四在て切てお采の
似くと顔の腹でうけきバ四召仕ふも仕成ゑひお紀ごろふ方
体ゑひわどめうゑひ変でハあるまひうまエ
代さんが虚言むつうう只戯れ行ふ鞠仕程のごと存まハョ
文ゑも私を出養色めまバして外下まハふ遠ひぎざるま
せんゑう記ぶ本望でぎざんまハョト恥ろしひのもうち
高且色の底を明をのハ意の癖ごと知ふまけるおゑ代ハ
代挨拶を図て ちよへ お采が まくれでお任ゑうバ私と清さんが

附て居ゑうふ後朱羅略ゑ真ハ行ゑひご家ドらまゑのハ
お采の四宅で不ふ来ぎらふと思ひまハョあうそまも四
お親の四薄公のわゑ行れ清ふ助さんをお母さんのところへ
上ゑうふ行ゑ行ふゑうぎらふ戸お案ぶでゑひョト
供ふの前へ清ふ助が清方へ書て飛札を出ふ早
速見留寄ね来ふふ人ふ清ふ助ふ射面ー
老雅をまふひ黄八ー後を屋ふ述て清ふ助の家の
ゑう四下熊の四屋のお定速ひの堂をで言入ける

男女の情愛ハ実に月下老人の所為なるべし
説に海雲寺助殿ハ尊き泉の上のくるぶし古
今に稀なる美人男にかゝれてまゝ世ぶ美くの美女
墓に まとわるゝ ままごと 遠をうえつくる 町家の
職しき娘の おまさ 彩さまで あこがれ 又人ハ
武士の故 繋情ゆゑ 川柳点をわるゝ おまが
意情を 奇なるなる

第六回

暗晴見しに花の色として今初見まゝ 寝ぬ とも更に
けまとハ三條石橋の他に 夜ありしに 翌日の 四ツ
ありとうや再 絶 おまさハ災ひが 来ひこるる 変ぞ ものこと
ぬぎる四谷 茶の 四屋の 郎君 泳ぎ 助 さま ハ日 経
墓のて 公の 底に ふこと 粗 さる 四方 みて 又郎君 まを 墓の
るを男 君 つづけて 言 侍の 似 ようしと 見
ものの 奥女さん 是非 側 仕ふ ようさま 手紙 作
の 在 所人 正真の 意人 眼 若 図 おまの

彩色迫まるまうして美粟けまべいよ〳〵紀を立やまう〳〵
まひてそれ流くも奴婢の夜せらまける翌日ゆ京〳〵
帰りを情〳〵、夫べおそ代と百四円義の原く為まを
うるへべき四穀〳〵あてゆうこけまべおそ千代ハおどろき脱べ
つ、おまみひろし郎君の体をうる時〳〵もまをおまを迫
の人ままべ彼お国をまべ者まま弟千外の人〳〵の案
ぎの程を男ハ参りて一旦おまを迫ハの看ふまま〳〵安堵
きを後刻より清〳〵助をもりておまの兄嫁と関〳〵弟ふ

相談をいきさをんと思案を極めて千貫を言上人と泳
ぎ〳〵助ぐ四郎人ぎまべおまを迫〳〵て常をおきべ人
四厳を帰る底公情〳〵き極ぐも見非ゆ〳〵と次の百人男
資後うふ引星うるへ泳生〳〵助 泳〳〵おまや ハイ
ア引びつくりいを〳〵まを 泳〳〵ナニ千極ハおどろくおまが
あるうめを方よりの竹方ともを痛ゆるうので迷武
いをハ ま〳〵ハ何ぎ お紀ハ おを薄ゆ 分極まを〳〵ト立ぐら
言うけて多紀ちべ郎君ハ完本と紀ものをを〳〵ませらまを

ぐらう　イヤ他のうでなくてはいけぬ此意地の不宜懷
の男でなくてはお妻の樣子を指先まで　チョイト突かれ
ないとのことでおまけに完成ひぐらう郎君の指
先は細き手身の指をうけて極りしめ　なる程此時私が
意地のつよいうをもまうしまうこと貴君を暗晩乃
樣よ意地のつよいうをまうしてうふと言門く
寿流人狼ふ妻の男が生狼ふて生人言傳の
歴〳〵ハうそうそとを面白く思〳〵乃ぐくしのうれば

孫更義理をうしなひて直ふお妻の手をしぐとく奥
をきりてで入ようふ此時まで彼女代女ハお居間ふ
ひとりて在つけるが此彼を者上つらひぐら　四郎
行時の間よ手樣ふ　ぐらうをしてお出行注ます
おまえさんお出さんも　ア帰つてでぐるまでの行程
お膳まうしまうしあそばとうとうと中て私が四郎人で
乃郎　宅早先へまつ門て四側へお出さん濃ひ急迫で
おぐるまうしまうよ　そうへ〳〵然つでくぐるませんヨ私がア

居りましたお座敷へ次の方へ参ろうとい
うこと所人ハイロ〳〵然でハどざるハませんお迎の人が
来ましたようそまとを開て厳さるのお側へ迎て
おいでのお遊ひるハョヲホ〳〵〳〵〳〵 泳へナラ〳〵おまえの迎の者が
参りましたことよ人行とやてまてもなくて作る事ハ
ようくらい然やはまくとも両親がおまえとろうしひとや
うらんば居今住居を付所へ新造て参ろう直ぐ引移ろう
まハ極よ中度せかしも不見やのうハ極よいろてそら

そうと早くそうと両親へ中送ろう極よ清く助れそうハ
て居イ参ます側へ参ます中ます家暫ものごと
うハと中て家老ども〳〵ハ〳〵ハ居イ手様様をうけうハ
しぶ家中で奥の部屋とも定めれば当ハト作せ参れ
一言人実ハ涙くも男〳〵召〳〵入ましたまハ義の為元
来大家の郎君とて自然と備ら四歳先ハ年代ハ番
性義の作ハかし〳〵出武まとまどおまえ兼て郎君人
をうけてかしも御側を勤〳〵ハ居と中ハねど中之の顔ハ

あくまで貴人けまで先の系をあつまりて迷ひの者ふ
手ゆをさるの〜我家ふ同居し〜清〜助ふ相続さまで
流石ふ御落しる好男子ふ男子ふ
変るるぐ仏程郎君さまのふ作るそも他の服とまで
おまきさんをお側仕のあ妻のと仏様して両親の方へ言
入まられるものを勝手ふ物産ふ出りけて来と所で途中ふ
災難ありさ一件のまぐ安堵の人連の流の居る兵人
手紙る手紙るものを言ふ〜ふ彩るものを我侍らーふ

ちゃ〜ヤそまぐらても郎君さまが元程を社作だろうぐ
ふひふおまきさんが郎君ふ御て出ものお側を放れぐふ
迷ひが来ても浮る交度をるふで来ふ仕ぐふ注
方がふひでぐどるませんるを亮も南もアノ本と迷の
人達とバおまきさんの姉上まで〜早〜帰して
おまきさんの別家のふひるを開せてあよ〜社成まーケ然
ちて変てお系さんが後ろおを成て来るのをを
ちて上成まーる 侍〜そまぐらても別系がふひ〜

言て笑ひまし　ちよ「ヲヤ何の風ぞ　清「なぜとのつゞめる
ものゝナおまさんゝハ情人ゝが出来て宅早本宅へ帰ら
るゝとの八程の大別業があるぞハるめり　ちよ「ヲヤ〳〵それハ
今さぞまろこと喜てゐどぎるまさんゝのヲ　清「ナニ〳〵即刻
ちゞまりさうなもでるゝハ何のくさはまうるゝ　ちよ「アレナ
おまさんが私ゐお供しのを情〳〵聞ます〳〵ゝ郎君様
以来よ情人ゝまるりてお在のゝとヲ　清「ナニ〳〵不理屈なりを
言なさんな何程して郎君様とおまさんが手紙繰を

ニヲ弟一春女が郎君さまゐゐおお同通りをしゝこうもなれ
まゝでハるゝ　ちよ「イヱ在ます〳〵このサトおまさが手紙ゐの
別荘ゐ居ます〳〵新へ泳生ゝ郎どのが乃ゝ遊びの節ゐ
別荘の庭を見物を成ゝて在為入手紙ちゞわく
おまさゐ以ゐを不をさせらまおまさも郎君ゐ意暮ゝて
見まで互ゐ公の中ゐ思ひつゞけあゝまゝる貞操をゝこと
あく〳〵物語まゝバ清く助ゝ言関係を聞て　清「ヲヲ　然ゝ
そゝまゝでハ眠来一夜の中ゐ両方が深ゐ性ゝゐるゝゝゞ

名儀姉の縁續が出来るものゞ何〻しても結の理窟
なれば近の人を先へ帰して直に此身は敵へ出て
同役元も相談の上御合ふ約束せしと行き違ひ
おまき迎ひに再度対面し　清八トキニモシおまさんを直に
おくさまと思ひ違ひ入組でたるものゞ出
来て即刻あやまり連立せやうとのぶれ
私が渡別らう参りてお園さんにお目かゝりて参るのお
たのまれをいささうとぞんじまして　お帰方ハ

先へお帰ん遊ばして　義ハ姉上さんへ
中て言てお呉なせと言ていそ〻ぎて
思ひ〻〻直ぐおまさ渡さぬと新の接拶
と挨拶し　エヽ　ありがとう　眼鏡ハ世話ハ
成まゝてあるがとゞまる　私どもの方でも一同ハ
配をゆゝまして眼鏡ハ今朝まで一人も眼ハ
まゝこのもおざるませぬ程の後ぎでおざるまゝ
仰の章ハ只今直ぐ渡し下まゝ　お願へやまゝ

おれの仕様ぶり又急度上ゐまして出接拶をいろ〳〵まうしうら
清「イヤ礼ハ侍るのうんのとやるのハ笑ひてゐざるませぬ先
刎おの弟ハ御座しやうぶ出来合うまうしうら什方も中
絶しそハ居りうれども御主女の家とハ親敷のうるぐらう
うう〳〵疎略なうハいうう〳〵ませぬ手什方で中通り先へ
立帰りて待てゐざれト言放しそ奥へ這入再度伺の
音沙汰うけまバ近ひの者ハ兵見合せ互ハ為武しうう
きどもおまハ厳の奥ハ居て出もせざれバ達もせざ

線ハ安堵の解ふれども御手代ハ沼系より御主ハ縁者
つゞれの中うう〳〵言ふ〳〵便りあて御まゐ虚実ハ新
ハ御ハ代作ハ帰りも言田楽の白き前ゐうう〳〵異安堵を
まゐども大うのおまゐが向ハ居まゐバ荒立てうのせれ
ゐ世ハ御主園へ対して面目のうき拾うふうも捨方ゐく一
且御園の出有しうる新田の方へ帰ゐ彩けう
まて見うう後の物語ハ古今奇代の新説向
此三冊の体とうう面白きう戦ハ拙案の

作とりぐ〜

狂訓亭　爲永春水戯作

狂文亭　爲永春江校合

春色田家の花三之巻了